



YUTA MIYAKE



JUNKO YOKOYAMA



MASATOSHI HASEBE



TERUAKI SUZUKI



合唱曲は どうつくられるのか

~「スプリングセミナー2013」の取材から



NAOTO AIZAWA



KAZUAKI OGIKUBO

東京は桜も満開の3月24日、津田ホールにて教育芸術社主催の「スプリングセミナー2013」が開催されました。

この会では、新作合唱曲による公開講座として、同声・女声・混声の作品各2曲が初演されました。各曲の講習時間は30分。まず新曲が演奏されると、作曲家による「演奏上の3つのポイント」が舞台に映し出されます。この3つのポイントを中心に、演奏者側と作曲家がトークを繰り広げたり、具体的に演奏したりといった内容でステージが進行しました。

司会は新進気鋭の合唱指揮者、藤原規生氏。実践的な指導方法や曲の読み解き方、作曲家がいるからこそ聞ける表現方法や曲への思いといったものが、司会者の好サポートにより会場をうめた参加者に届けられる充実したセミナーとなりました。

ヴァンではセミナー終了後に、作品を提供してくださった6名の先生方にお話をうかがいました。作曲家はどう感じて、伝えようとするのか。合唱指導にとどまらず、音楽をつくり、表現する上での貴重なお話をいただきました。



三宅悠太

いまの「いま」

(同三div.有り)

工藤直子 作詞 三宅悠太 作曲

Vent (以下V)：歌詞には「ひとりぼっちはさびしいが ひとりぼっちはほこらしい」とあります。

三宅：工藤直子さんの『のはらうた』では、動物や虫、草木、風、海、星…さまざまなものが主人公になって、その視点から言葉が紡がれています。今回の主人公は空をはばたく「おおわし」ですが、「わし」ではないんですね。個人的にそこが好きです。世の中にはいろんな人がいるけれど、どんなに立派に見えたり華やかに見えたりする人でも、きっと「ひとりぼっち」をどこかに抱えて生きているんじゃないかなって思うんです。さびしいと感じつつも、実はこの「ひとりぼっち」は人の根っここのようで…。この詩にはなにか特別な思いを抱きながら作曲していたかもしれせん。

V：最後のピアノの連打音が鳥の鳴き声のようでした。

三宅：おおわしくんは、わたぐもさんから『きみはまるで「ひかる ひとりぼっち」だ』と言われ、そこから心が動いていくんですね。最後はほこらしい気持ちで飛んでいき、はるか遠くでキラーン！と輝くようなイメージ。曲尾はそんな映像を頭のどこかに浮かべつつ筆を進めたように記憶していますが、ここに限らずどんなイメージで演奏していただいても構いません。中間部のア カペラの楽想なども、解釈は自由！演



三宅悠太先生

奏者も聴く側も、自由に想像を膨らませることのできる余白というか、そういうものを作品に込めたいと思いました。

V：この曲への思いをお聞かせ下さい。

三宅：昨年亡くなられた畑中良輔先生が、なにかの記事でこんなことをおっしゃっていたのを覚えています。「小さい頃『ふるさと』を歌っていたときには、ほとんどの子はうさぎは美味しいものだと思って歌っていた。でも大人になって全体を知ったときに、‘あのときこんなことを歌っていたんだ’と気づく。歌は時を経て‘熟成’されるのだ。」と。とても素敵ですよ。この『いまの「いま」』はひよっとすると子どもたちの方が純粹に歌うことができるのかもしれませんが、子どもの頃に感じる「ひとりぼっち」の感覚と、大人になってから感じる「ひとりぼっち」の感覚はきっと違うものだと思います。あのとき「ひとりぼっち」って歌ったけど、大人になってこう感じるようになった。ふと思い出してはなにか深まるような作品になれたらこんなに嬉しいことはありません。そんな願いを込めて作曲しました。

横山潤子

わらべうた 三つ、 ～ホラホラほうらい豆～

(同三div.有り+Perc.)

横山潤子 作曲

V：セミナーの中で、今回の作品は「楽しげなものを集めた」とおっしゃっていました。

横山：わらべ歌は、歌詞が変化して、もとの意味や脈絡が通らなくなってしまうものが多いんですが、ストーリーをきちんと追っていくものが手持ちの資料の中にまだいくつかあったのと、前の曲(『わらべうた 三つ、～ジョロ ジョロ ハイ!』)では、手まり歌が女の子らしく、後半もほわんとした南の島のおっとり系だったので、今度なにか違うことをしようと思ったとき、ここはやっぱり「笑い」だろうと(笑)。

V：どうして「笑い」なのでしょう？

横山：今回はコンクール用ということで曲を書かせていただきましたが、コンクールって、歌う側も審査する側もどうしても真面目いっぽうなお顔になっちゃいがちでしょ。審査員の先生たちにも、たまには笑ってほしいかなって。それに、愛も平和も友情もいいんだけど、歌の練習もいっぱいして、それについて何か学習もして、ずーっといい子でいなければいけないの？っていうイメージがどうも私の肌には…いい子でいたくない虫が騒いでしまう(笑)。子守歌だって、たまには違った使い方もアリかなあと思ったので、「おふざけ・笑い」のものが二つきて、最後に子守歌で歌い上げて終わることにしました。

V：「子ども」に「子どもらしさ」を求めているところが、おもしろくもあり、少し複雑な気もしました。

横山：そう、難しいですよ。押しつけることではないし。「子どもらしくなさ」もまた「その子らしさ」だったりするんでしょうし。それもこれも含めて、でもとにかく、いいかたちで聴き手に「お子さまのエネルギー」が伝わってほしいんです。それにはやっぱり何か磨いていかないと。「素のままの私を愛して！」って言われても、ほんとに素のままだったら「ノーサンキュー！」でしょ(笑)。目に見えないもの、時間をかけて育てるものを積み上げていくことが、学年や年度を超えた佳いものを繰り越していけることにつながるんじゃないかな、って。そういうふうな、最近ちょこっと思います。



横山潤子先生

長谷部匡俊

無伴奏女声合唱のための 風の話

(女三div.有り)

立原道造 作詞 長谷部匡俊 作曲

V：今回、同じ立原道造の詩を選ばれた相澤先生が「立原道造の作品には、フランスの香りがする」とおっしゃっていました。長谷部先生はどうお感じですか？

長谷部：私も同感です。フランスの雰囲気を感じて、自分としてはフランスふう之初の「風」の循環主題を書き出しました。…でも登場するのは、日本の子どもたちのイメージなんですよ（笑）。

V：フランスの子どもではなかった…（笑）。

V：立原道造に特別な思い入れはありますか？

長谷部：思い入れがあるというよりは、折に触れて読みたいくなる詩人の一人なんです。中也も好きですが、自分が曲を書くとなると、中原中也よりも立原道造かな、と思います。なんとなく波長が合うというか。この詩は道造の10代の終わり頃に書いた習作ですが、行間や背景から立ち上ってくる空気をすごく感じました。詩が「あれは見えなくてよいことを」と終わりますが、その言葉を受けてすぐパタンと本を閉じるのではなく、周りの子どもたちみんなが「そうなんだね」と納得した感じになる…そんな場面の空気を感じてほしいなと思います。

V：場面転換についてお聞かせください。

長谷部：いろんな要素で場面の違いを書き分けているので、そこをセンシティブに表現してほしいですね。例えば最初の子どもの場面では、それまでのサクサクした感じから、突然ゆったりした感じになります。でもテンポの変化だけではなく、色合いも変えてほしいのです。演劇でいえば、照明の色がガラッと変わるように…。コンクールや演奏会では照明の色は変わらないと思いますが、それでもふっと空気感が変わるように歌ってもらいたいです。僕はふだん趣味でルネサンスの合唱曲を歌いますが、その楽譜はすごくシンプルです。それをどんなふうに表示

していくか考えることはおもしろい。そういう楽しさ、おもしろさを、子どもたちにも味わってほしいなと思いながら作曲しています。

V：ちなみに、具体的にイメージする照明の色はありますか？

長谷部：最初の子どもはオレンジっぽい照明かな？あまり明るくはないと思います。次の子どもは緑、最後の子どもは青い背景に昼白色の光でしょうか。時間は、春の午後3時～4時ぐらいですね。心地よい風に吹かれて「そういえば風って見えないよね」という話になったのかな、と思います。



長谷部匡俊先生

鈴木輝昭

息 無伴奏女声合唱のための

(女三div.有り)

谷川俊太郎 作詞 鈴木輝昭 作曲

V：「息」の歌い方は場面ごとにどう意識すればよいでしょうか？

鈴木：基本的には息 [Ha] のヴォカリーズがテーマですから、循環して出てきますよね。テーマが帰ってきたという「テーマの復帰」が楽曲の構造上大切な部分になってきますので、それをより正確に、より印象深く、より存在感をもって演奏してほしいというのが一番の願いです。

V：作品を全体で感じてほしい、とおっしゃっていました。

鈴木：それは作曲上の思いで、演奏者は緻密に楽譜を読み取るということがとても大切なことです。なにゆえそこはそう歌わなければいけないのか、ということに繋がります。リズムと音程の向こう側にあるもの…そういつてしまうとすぐに「表現」「感性」「言葉の表情」などに走ってしまいがちですが、そうではなくて、フレージングであったりデュナーミクの配分であったり、やるべきことを、しっかりとやらなければいけません。

V：3度の和音についてお聞かせください。

鈴木：曲中には瞬間ごとの3度の和音もありますし、調構造の機能をもつ3度の関係もあります。この曲は、いかに3度を克服するか、なんです。やっぱり「ドミソ」でハモるのが一番難しい！3度をきちんときれいにハモって歌うことは基本なんですね。曖昧になると濁ってしまうので、クリアに仕上げていくことが大切です。

V：先生にとって「風」「虫」「星」はどんな印象ですか？

鈴木：僕は曲をつくる時、そういう言葉の文学的分析や解析をあまりしないんですよ。言葉そのものから受けるインスピレーション…例えばこの『息』というタイトルでもって、全体をイメージするんです。

V：少し意外です。

鈴木：というのは、メロディーにどう変換するのか、ハーモニーとしてどういう色をもっているのか、どういう速度で語られ、歌われるべきなのか。そこに関心が集中していくからです。谷川俊



鈴木輝昭先生

太郎さんとも話したのですが、詩人も解釈される・分析されることは好まないという話です。理屈で読んでほしくないとおっしゃっていました。右脳から右脳へのキャッチボールなわけであって、左脳で会話するのであれば、詩である必要性も音楽である必然性もないんですよね(笑)。

相澤直人

立原道造の詩による3つの心象 この闇のなかで

(混四div.有り)

立原道造 作詞 相澤直人 作曲

V：『この闇のなかで』の詩についてお話しただけですか？

相澤：立原道造のこの詩は、もともとソネットの形でできていますし、詩自体が音楽的なんですよ。そこに曲をつけるということはとても恐ろしいことなので、あまり詩について触れられたくないなあと思っていたんですけど(笑)。僕は立原道造の詩には、ややパステル調の色彩を感じます。僕はフランス音楽が好きなので、彼の詩に感じるフランスの音楽の香りや空気感に共感して曲をつくりました。

V：セミナーでは「細かい音符にこそメッセージが込められている」とおっしゃっていましたが、長い音と短い音の使い分けについてはどうお考えですか？

相澤：使い分け…！そうですね、僕はすごく意図して曲をつくることの方が少ないんですよ。「とほい〜」の部分は、そのあとの「闇が(闇が闇が闇が…)」を生かすためにゆっくりにしました。基本的にはやっぱり、細かい音符の動きには「心の揺れ」がある。*p*やユニゾンには、作曲者の伝えたい思いが強く表れている。そういうところをぜひ強調して歌ってほしいですね。これはほぼ、すべての曲にあてはまるかと思います。

V：歌い手に曲を自由に表現してもらいたいと

ということについても触れられていました。

相澤：僕は曲を書き上げた瞬間から、もうその曲を指揮者の目でみてしまうんですよね。だから、自分の曲を演奏していても、あまり自分の曲をやっているという感じはないんですよ。自分の曲を「こうである！」と思って演奏しても、当たり前のことなのですが、やっぱり自分が想像した以上のものは出てこないんですよ。なので、僕は自分の曲を自分で指揮するのはあまり好きではないんです。自分の想像どおりの演奏になるかならないか、のどちらかしかないのです。そこに合唱団ならではの色や味が加わることで、新たな発見があって、曲に新しい命が吹き込まれたような感じがするんです。そしてその発見こそが、その先の創作意欲にもつながっていくのです。



指揮：相澤直人先生

荻久保：すべての作曲家が僕のように考えているわけではないと思いますが(笑)。中には、書かれた音はこのように演奏されるべきである、デューナーも事細かに書かれていて、それ以外は認めない、と考えるタイプの作曲家もいます。こう思うのはきっと僕が、指揮者として演奏に携わっているからじゃないかな。

V：書くことが専門の方と、演奏もされる方とでは違うということですね。

荻久保：相澤くんも指揮科を出ているので、作品を書くときにはたぶん「指揮」をすることを考えていると思いますよ。

V：テンポが遅いか速いか、微妙なことでも受ける印象はずいぶん違ってきますし、それを受けてまた表情が変わりますよね。

荻久保：そのつど、どちらがいいのか、どうすればいいのかを考えて演奏してほしいです。他の人の曲を演奏するときもね。

V：先生はバッハへのこだわりがおりますか？「シジミチョウ」の場面に入ったとき、フーガが始まったと思いました。

荻久保：そうそう。僕は対位法的な作品が多いですね。まだまだ対位法も捨てたもんじゃないぞ！とね。もっと対位法が尊重された作品があってもいいんじゃないかなと思っています。

V：『こころには森がある』のもとになった、はらだ たけひでさんの絵本についてうかがいます。「この絵本から、だいたい四分の三ぐらいのテキストを使って歌詞を組み立てた」とおっしゃって



指揮：荻久保和明先生

荻久保和明

こころには森がある パシュラル先生のはるかな旅

(混三div.有り)

はらだ たけひで 作詞 荻久保和明 作曲

V：セミナーで先生が「楽譜に書かれていることをきっちり歌うだけではなく、柔軟に歌い手が表現してよいのだ」とおっしゃっていたのが印象的でした。

いましたが、どういうことを意識して言葉を選ばれたのでしょうか？

荻久保：場面ごとの色合い、色の転換ができる言葉を選びました。それから、メロディーになりにくい言葉は省きました。長いフレーズも避け、できるだけ短い言葉を。あとは、なるべくインパクトのある言葉です。それぞれの場面について、絵

本を見ていただくと、その色彩感がよく分かりますと思いますよ。

V：ではこの曲を演奏したり聴いたりするときは、絵本を見てほしいということですね。

荻久保：ぜひ。指揮者のイメージの助けになると思います。

— 新作合唱曲による公開講座 —

Spring Seminar

2013

3月24日(日)12時45分～16時40分／津田ホール(東京都渋谷区)
『スプリングセミナー』は、コンクール自由曲向けの新曲の講習会として、今年初めて開催されました。

- 【同声合唱】 指揮：長岡利香子 合唱：八千代少年少女合唱団
ピアノ：鈴木綾子
- 【女声合唱】 指揮：古橋富士雄 合唱：レガー口東京
- 【混声合唱】 harmonia ensemble (ハルモニア アンサンブル)

また講座終了後には、NHK全国学校音楽コンクール課題曲のワンポイントレクチャーが行われ、小学校の部(講師：古橋富士雄、於：ホール舞台)、中学校の部(講師：相澤直人、於：ロビー)、高等学校の部(講師：藤原規生、於：リハーサル室)それぞれに多数の先生方のご参加をいただきました。



● オリジナル合唱ピース



いまの「いま」 同声編 67
わらべうた 三つ、～ホラホラほうらい豆～ 同声編 68
SPRING SEMINAR 2013 [同声編] CD



無伴奏女声合唱のための 風の話 女声編 33
息 無伴奏女声合唱のための 女声編 34
SPRING SEMINAR 2013 [女声編] CD



立原道造の詩による3つの心象 この間のなかで 混声編 69
ころには森がある バシュラル先生のはるかな旅 混声編 70
SPRING SEMINAR 2013 [混声編] CD

※2014年のスプリングセミナーは、3月23日に津田ホールにて開催予定です。

授業者に 訊く— 1

正岡子規の生地・愛媛県松山市の窪田小学校を訪ねました。窪田小学校は平成26年度、第45回中国四国音楽教育研究大会の会場校でもあります。元気いっぱいに歌って踊る1年生と2年生の音楽の授業、ならびに「伝え合い、学び合う」子どもの育成を目指す窪田小学校の取り組みについてご紹介いたします。



授業者：酒井和重（松山市立窪田小学校）

本時の授業の位置付け

本時は、「拍の流れを感じながら、音楽を楽しもう。」という題材で授業を展開します。歌詞の内容に合う身振りを考え、拍の流れやフレーズに合った動きとなるように表現を工夫します。

今までに学習してきたことを生かして、跳ねる、背伸びする、手拍子を打つなどの動きを取り入れたり、友だちと向かい合ったり手を打ったりコミュニケーションをとったりしながら、仲よくグループ活動をします。

スキップのリズム(タッカ ♪♪)が多くみられる、はずむ感じの[ア]の部分と、伸びやかなリズム(ターンタ ♪ ♪)が現れる[イ]の部分の対比を感じ取り、旋律の特徴に合った歌い方や体の動きを工夫できるとよいなと思います。

授業の流れ（2年生）

	○学習の内容 ・学習活動	●教師のかかわり ☆評価
導入	○楽しい感じのする既習曲を歌う。 ・『うたえ バンバン』	●体全体でリズムを感じ、1拍目を意識して歌わせる。
展開	○『えがおできょうも』に合う身振りを考える。 ・曲を聴いて感じをつかむ。 ・[ア]と[イ]の旋律の感じの違いについて話し合う。 [歌詞に合う身振りを工夫しよう。] ・各グループで、歌詞に合う身振りを工夫する。 ・いくつかのグループが発表する。	●拍を感じながら楽しく聴き、曲の感じをつかませる。 ●「あいあいタイム」を利用して友だちと話し合わせる。 ●様子を表す言葉に気を付けて歌詞を読ませる。 ☆歌詞の表す様子を想像しながら、内容に合う体の動きを工夫しているか。
まとめ	○本時を振り返り感想を発表する。 ・最後にみんなで身振りをつけて歌う。	●歌詞の様子を思い浮かべながら表情豊かに歌わせる。

思いを伝える身体表現と歌声

聞き手：緒方 満（比治山大学現代文化学部教授）

こんな子どもに育ってほしい！

緒方：先生の歌声づくり、授業づくりは、本当に素晴らしいです。彼らが5年生、6年生になったとき、どんな子どもに育ってほしいですか？

酒井：音楽に限らず、いろいろな場面で自分の思いを自分の言葉で人に伝えていける子どもにしたい。そしてできれば、伝える手段として音楽があったらなお素敵だなあと思います。だから今、身振り、手振りを恥ずかしがらずに思いのまま自己表現することができる低学年の子どもを育てたいと思って、あのような授業をしています。

緒方：なるほど。

酒井：特に歌には歌詞がありますよね。ただ自分で歌って楽しむだけではなく、聴く人の存在を意識して、人に伝えてほしいと思います。例えば『桜の木になろう』は6年生を送る会で歌う曲なので、相手を意識して歌詞を伝えてほしいんです。そして伝える場合には、絶対に手が必要になると思うんです。よく子どもたちに言うのですが、けんかするときには口で「やめてや」と言うだけではなく、身振りつきで「やめてや！」ってなるでしょ、って。そういう気持ちの表現が必要ではないかなと思います。

緒方：同じ曲を1年生と2年生の2つの授業で聴きましたが、わずか1年の学年差であんなに音楽表現に違いがでるとは驚きました。

酒井：以前、松山市内の先生方にアンケート調査を行ったところ、大人になってから音楽に関わることといえば車の中で聴くラジオやたまに行くカラオケぐらいだったんです。私の友人は、やはり教員なのですが、コマーシャル

で流れる音楽に合わせてすごく楽しそうに体を動かします。自然に体の中に音楽があるというか…。いいなあって思います。

緒方：低学年のうちから、そういう子どもたちをずいぶん育てていらっしゃると思いますよ。

子どもと音楽の自然なつながり

緒方：授業の始めから終わりまで、子どもがとっても自然なことに驚きました。そして先生を見ると、先生で自身も子どもと同じように自然で、ずっと笑顔絶やさないんですね。子どもたちがお互いに目と目を合わせているし、先生も子どもたちといつも目を合わせていらっしゃる。このあたりに先生が目指しておられる音楽教育観があるのでしょうか？

酒井：私の母も音楽教師だったので、「階名が読めて楽典ができると、年をとって（いい曲だな）と思ったときに歌

えるから、すごくいいよ」と言われてきました。でも、階名や楽典を上手に教えられないと、子どもは音楽そのものをいやになってしまいますよね。「音楽を愛好する心情」をずっともち続けてほしいから、楽しんでほしいのです。先生に見ていただいたように、友達同士で目を見合わせたり、私と目が合ったりすると、子どもは絶対につこりするんですよ。楽しい曲を暗い顔で歌われるのはいやですし、笑顔は大事にしたいと思っているので、声を掛けるようにしています。

緒方：どのようにしたら育てられるのでしょうか？それとも先生の授業を受けていると自然にそうなるのでしょうか？

酒井：でも全員が笑顔ではないですよ。ときには寂しそうな顔をしている子どももいるので、そういう子には近付いて行ってほったをつついてみたり、トトロの歌だったら、大きなトトロのぬいぐるみがあるので、それを持っていき、チュ！ってしてみたりします。

緒方：やっぱり先生が関わって子ども





○さかい・かずえ
松山市立窪田小学校

たちを変えていらっしゃるのですね。
酒井：私と顔を見合わせて笑わない子どもはいないので(笑)こちょばして(くすぐって)、笑顔にすることもあります。それは5年生でも6年生でも同じですよ。

グループ学習のねらい

緒方：グループ学習はどういった意図をもっていらっしゃるんですか？

酒井：全員の前だとしゃべることができない子どもや自分の意見が言えない子どもも、小さいグループだったら言えるんですよ。本校では特有のグループ学習の時間「あいあいタイム」を設け、いろんな教科で行っています。4～5人や2人のグループに分かれて相談する時間です。小さいグループだと伝えやすい、表現しやすいからです。そこで自分の意見を言ってみて、「これはあっているんだな」と思うことができれば全体でも発表できる子どもが育ちます。伝え合う教育の一環として私も取り入れています。

緒方：少し1グループあたりの人数が多いかな、2～3人でいいのかな、とも思ったのですが…。

酒井：私もそれは思いました。でも2～3人とアイデアを出せない子どもに

は難しいのかなぁとも思って…。

緒方：もっと簡単な課題でもよかったのではないのでしょうか？例えば、1番全部の身振りを考えるのではなく、「ここだけ」と絞ってしまったりしてもいいのではないかと思いました。

酒井：なるほど！

緒方：1番全部はちょっと荷が重かったかなと。

酒井：区切ればいいんですね。

緒方：1年生も2年生もグループ学習が大きなウエイトを占めていましたね。どう学習の形にすればいいのか、私も悩んでいましたが、いい方向性を示していただきました。

酒井：人数を減らし、つくる部分を少なくして…。

緒方：教師が課題をコントロールする、ということですね。なにかを「つくる」活動での教師の重要な役割は、子どもにとってつくりやすい環境を整える、つまり活動の場の設定にあるかなと思いま

す。さらに言えば、場の設定の在り方に、発達段階に応じた系統性を見いだせないかなと。

拍とリズムの感じ方

緒方：「拍」や「リズム指導」について教えてください。指導案には「体全体でリズムを感じ、1拍目を意識して歌わせる」と書かれていました。「1拍目」のねらいはなんですか？

酒井：強拍を感じてほしい、ということです。「ウン、タン、ウン、タン ♪ ♪ ♪」と手を打つときにずれる子がいるんです。それはどうしてなのか…。

緒方：1拍目を意識させたい、ということつまり、1拍目、2拍目、3拍目、4拍目それぞれの拍の役割や意味を、理屈ではなく体で感じなければいけないのではないのでしょうか。例えば、4拍目は1拍目の準備ですよ。「4→1」です。そして1拍目は柱になる強い拍。





次の2拍目は弱い拍、受け止めの拍。そういったことを子どもたちが自然に感じられるように学習を積み重ねていけば、より豊かなリズム表現ができるようになると思います。

伝え合い、学び合う子どもの育ち

緒方：授業規律がとてもよかったのが印象的でした。グループ活動や楽器をしまった後など、少し乱れるところがあっても、さっと整う。なにか気をつけていらっしゃるのでしょうか？

酒井：それはこの学校の学習訓練というか…どの科目でも、どの学級でも、そのようにしています。私個人の力ではありません。学校全体で「伝え合い、学び合う」子どもの育成を目指した取り組みを続けていますし、人の話を聞く校風のおかげだと思います。

緒方：6学年すべてを担当していらっしゃるそうですが、音楽集会など、学校全体での音楽のプロデュースについて、教えていただけますか？

酒井：本校では、1学期と3学期は音楽集会を、そして2学期には本校のテーマ「風」にちなんだ名前の「風の子発表会」を行います。この発表会は、音楽や表現活動…詩の朗読など、ふだんの学習の中で積み重ねた成果を全校で互い



に発表し合う場です。これらの集会、発表会を通して、全学年が年に1回は全校児童の前で、音楽に関する発表をする機会を設けています。

緒方：子どもたちは、上級生の歌声を聞いているのですね。もちろん先生の範唱があつてのことでしょうが、だから子どもたちの中には、頭声的な発声で歌える子どももいるんですね。朝、学校に来てすぐ、歌声が聞こえてきました。

酒井：今月の歌ですね。この歌にも、やっぱりちょっと身振りや手振りが入ったり、拍子も変えたりしているんですよ。それを朝の会と帰りの会に歌っています。

緒方：歌声もすばらしかったです。子どもたちがのびのび自然に歌っているのが伝わってきました。どういう歌唱指導をされているのでしょうか？

酒井：私は歌が専門ではありませんが、おらび倒す(がなりたてたり叫んだりする)のはいやなんです。子どもって「こんなふうに歌ったら？」という、まねをしますよね。だから自然な発声を、聞いてまねして聞いてまねして…という繰り返しです。

緒方：先生がモデルなんですね。

酒井：2年生は「対比を感じ取り」と指導書にも書いてあったので、「ターンタ♪♪」と「タッカタッカ♪♪♪♪」のリズムの違いを強調するようしたかったのですが…。もうちょっと自分たちで歌い込んでいけば、違いが出たのかもかもしれませんね。

緒方：私の印象では、子どもたちは歌詞の印象で身振りをつくっているような気がしました。リズムの特徴やおもしろさ、音符の違いに注意するといったのかな、と思います。そうしたら、もっと音楽的になるのかな。音楽づくりの参考にもなりますし。

酒井：なるほど、そうですね！



○おがた・みつる
比治山大学現代文化学部教授

「あいあいタイム」の活用

Vent(以下V): 学習の規律といいますか、学び方がしっかりと身に付いている感じがしました。低学年のグループ学習は成立させるのがなかなか難しい場合もありますが、しっかりと取り組んでいらっしゃいました。

高石: 本校では国語科を中心に、他教科との関連を図りながら、さまざまな言語活動を通して豊かな表現を育成することに努めています。ペアやグループで話し合う「あいあいタイム」を設け、学習を深め定着させることに活用しています。特に、小グループでの「あいあいタイム」を授業効果を高めるため、意図的に取り入れています。子どもの思いや考えをグループ内で伝え合うことで高め、深めていっています。子どもたちから、グループで話し合いたいです、という声が出ることも少なくありません。

V: 「あいあい」というのは…?

高石: 話し合い、聴き合い、練り合い、深め合い、伝え合い、学び合い、ふれ合い、かかわり合いなどの「～合い」の言葉がつく活動をまとめて「あいあいタイム」と呼んでいます。本校では伝え合い学び合う学習活動を大切にしています。子どもたちは、自分の思いや考えを友達と話し合い、聴き合うことを通し

て、思いを確かなものにしたり豊かなものにしたりして学びを深めます。この名前は徐々に浸透し、子どもたちもこの活動を楽しむことができるようになりつつあります。

国語科と音楽科との関連

V: 国語科で習得した基礎学力を他教科との関連の中で活用するとのことですが、具体的に教えていただけますか?

高石: 国語科では詩の群読をよくします。音楽科でも歌には歌詞がありますので、その意味をくみ取って、感じ取らなければいけません。国語科では毎月、低・中・高学年別に学年の発達段階に合った詩を選び、暗唱したり俳句を作ったりして、言葉の感性を育てていますので、それが波及し、より高まっていくのではないかと思います。

V: 音楽の授業では縦書きの詩を読まずに、楽譜から入ってしまうことも少なくありません。それでは言葉そのもののリズムを感じるのが難しく、言葉に込めた作者の思いがじゅうぶんに伝わりません。

高石: ふだんから「ことばであそぼう集会」を実施するなど、学校全体で言語環境の整備、言語表現の場づくりに取り組んでいます。詩の朗読では口の開け方なども指導しますし、言葉をきれいに発音するなど、そういうことが音楽にも結びついているのでしょうか。

V: 今日の1年生のグループ活動でも、伴奏がなくても、音程が保たれていました。詩の朗読などで、声を遠くに飛ばすということができているからかもしれませんね。

高石: 「あいさつ・歌声・やさしい言葉」が響く学校がテーマとなっています。言

葉も大事ですが、音楽科では体で表現することを低学年のうちから行っています。低学年から慣れ親しんでいるために、高学年になっても自然に体全体で表現することができるのです。

V: 音楽だと手をつないだり、おしりをぶつけたりすることも自然にできますね。見えない友達との絆を手を握って実感することは、とても大切だと思います。

開校の精神を受け継いで

V: 子どもたちの表情が自然で爽やかなのは、学校全体の雰囲気が素敵だからですね。

高石: 保護者や地域の方々も大変協力的で、温かい雰囲気の中で、子どもたちは明るくのびのびと育っています。この地域は一年を通じて風が強く、開校の記念碑にも、春風のような優しい心を持ち、逆風にも立ち向かう意志力と体力を育んだ子どもが、豊かな風(個性)を大空に力強く吹き上げていくという願いが刻まれています。新しい風を起こすべく研究を進めていますが、豊かな表現力を育てていくためには、一人一人の表現を相互にしっかりと受け止めることが大切です。双方向的な伝え合いの力が自己と他者を結ぶ人間関係力につながっていくと考えています。平成26年度には中国四国音楽教育研究大会があります。音楽科の特性を生かしながら、「自ら学び、豊かに表現する窪田っ子」の育成を目指して実践を積み重ねていきたいと思っています。



高石利保 先生
松山市立窪田小学校校長

授業者に 訊く— ②

大阪城からほど近い場所に位置する大阪市立董中学校を訪ねました。

3学期末に行われる校内音楽コンクールでは、合唱に加え、クラスごとの器楽合奏の発表が特色となっています。生徒は既習のリコーダーを中心に、初めて経験する楽器も演奏します。

「演奏を聴いてもらう」ということを大切にしながら、生徒と指導者が一丸となって器楽合奏に取り組んでいました。



授業者：谷本 卓（大阪市立董中学校）

本時の授業の位置付け

本校では、3学期末に1、2年生のクラスによる校内音楽コンクールを行っており、各クラスが合唱と器楽合奏を1曲ずつ発表します。通常、選曲は2学期に行い、3学期の8時間をコンクールで演奏する合唱と合奏の練習に充てています。

本時では、2年6組がコンクールに向けて合奏『オペラ「カルメン」より第1幕への前奏曲』を仕上げています。2学期にアルト・リコーダーの学習をしましたが、木琴や鉄琴、ティンパニなど生徒にとっては初めて経験する楽器もあります。それぞれの楽器の奏法を教師が教え、拍に合わせることを常に意識させながら、アンサンブル全体をまとめる方法で演奏の完成を目指します。



山西雅人 先生
大阪市立董中学校校長

授業の流れ

	○学習の内容 ・学習活動	●教師の関わり
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○校歌を歌う。 ○『自分らしく』を練習する。 ・出だしの16分音符を歯切れよく表現する。 ・一つ一つの言葉を大切に歌う。 ・生徒による指揮と伴奏で合唱する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●全体で歌う中で、各自の発声を確認する場を設けながら歌唱させる。 ●「歌詞を“しゃべる”感覚で歌うことを意識して表現しよう」と呼びかけ、変化をつけやすいように伴奏する。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ○合奏の学習内容を確認する。 ○拍打ちに合わせ、全体で演奏する。 ・自分のパートのリズムを手拍子でたたいてみる。 ○各楽器のパート練習をする。 ○全体練習をする。 ・自分と違うパートの音をよく聴いてアンサンブルのバランスを意識する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●各楽器とも、楽譜にチェックしたことをしっかりと演奏できるように確認させる。 ●少し遅めのテンポから始める。 ●演奏しにくい箇所などを確認する。 ●演奏ごとに拍打ちのテンポ設定を上げ、練習させる。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○拍打ちをせず全曲通して演奏する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●各楽器の上達したところを紹介する。

中学生のクラスによる器楽合奏の実践

聞き手：福山昌美（大阪府立守口東高等学校）

校歌を毎時間活用する

福山：生徒たちの声量に驚きました。ピアノの方を向いているので私たちとは反対を向いているのに、しっかりこちらまで聞こえてきました。

谷本：校歌はほぼ毎時間歌わせますし、しっかり声が出ていなければ、他の教材に入らずに1時間中校歌しか歌わない、ということもあります。「校歌をしっかりと歌おうよ」という気持ちもありますし、そのときの生徒の状態を校歌の歌い方で察知しています。

福山：私も校歌を毎時間歌わせるので、勉強になりました。それから、次の『自分らしく』の指導では「歌詞をしゃべろう」という言葉が印象に残りました。

谷本：歌詞は棒読みになってしまいがちなんです。松井孝夫先生の詩はとても分かりやすいので、その詩に「自分も

こういう経験がある」とか「分かる分かる！」と共感してもらうために「しゃべる」というニュアンスがいいかなと思いついて、「読む」と「しゃべる」では意識が違ってきます。意識すれば口が動き出しますし、口が動けば、声がまた一段と出るのではないかと。

指導用オルガンを効果的に

福山：器楽に入ったとき、心の中で（大丈夫かな）と思ったのですが、すぐに指導用オルガンで拍の音を出しながら練習に入られました。クラス合奏のまとめ方があるのだなと思いました。

谷本：『カルメン』のように縦横がはっきりしているものは、まずリズム隊をかつちりさせることが大事だと思います。特に裏打ちをしているリコーダーが（つまらない）と思ってしまうと、だ

らけた演奏になるし、大太鼓が調子よく乗り過ぎてしまうと、どんどん速くなる（笑）。そのあたりのバランスや、他のパートがどういう音を出しているのかわかるために、拍を聴きながら練習する方法を取り入れています。

福山：どの楽器の生徒も目的をもっているという…、例えば「太鼓の音色を5段階つくる」というような、「こうしよう」「ああしよう」という積極性にあふれていて、中学生でもこんなことができるんだと驚きました。

谷本：生徒がどこまでできるか、たぶん生徒自身も分かっていないところがあるんですね。だから「こうしたらええねんで」と示してあげると、できたときに（おもしろいかも）という顔をします。そうしたらつかみはOKだなと。





○たにもと・たかし
大阪市立董中学校教諭

楽譜より実演で

福山：楽譜で説明されずに、太鼓などをたたいて見せて「やってごらん」という指導をなさっていました。楽譜はどのように読ませているのでしょうか？

谷本：楽譜を最初に配って、木琴などの生徒には「ドレミを書きなさい」と言います。そこからは口伝えが多いです。早道は、全部の楽器を実際に演奏して見せることだと思います。自分ができないことはもちろん生徒はできませんし、そこからどうすれば演奏効果が上がるのか、どう変えていくのか、そこを考えていくことが大事かもしれません。

福山：楽器の決め方はどうなさっていますか？

谷本：キーボード類はこちらから生徒を指名しますが、あとは「この曲ではこんな楽器を使うよ」とホワイトボードに木琴、鉄琴、大太鼓などと列記しておきます。「木琴やりたい人！」と言うと、ぱっと手が上がりますよね。そうしたら「僕とジャンケン！」。木琴で負けても、次に鉄琴や大太鼓のジャンケンに挑戦していいよというシステムにしています。

福山：常に先生が生徒と関わっているんですね。

谷本：合奏することは楽しいと生徒に思ってもらいたいです。器楽合奏はハードルが高いというイメージがあるかもしれませんが、歌は苦手だけど太鼓は好き、おもしろい、と音楽を好きになる生徒が1人でも増えたら、それが何よりだと思います。

福山：歌は苦手だけど器楽はがんばれる、という生徒もいますからね。

谷本：僕がそうだったんです。歌は苦手でしたが、器楽や鑑賞の授業は大好きでした。

言葉に置き換えてみる

福山：「曲」になるまでにどのような過程をたどってきたのかが気になります。

谷本：まずリコーダーを先行させます。こんな音がするんだよと。ソプラノ・リコーダー、アルト・リコーダー、木琴、鉄琴と回って…ここまででこんな音がするんだよと、ある程度各パートの音を埋めたものをピアノで弾きます。カラオケをつくるイメージです。それからキーボードの生徒に演奏を代わってもらい、太鼓の生徒のところへ行って教える。

福山：高校で合奏をするときの悩みなのですが、休符を数えられないんです。他の人が演奏している間に自分がなにをしているのかをわかってくれなくて。

谷本：アンサンブルを教えるのは大変ですよ。僕は休符のときに「イチ、ニ、サン、シ、ニィ、ニ、せーの！」と言っています。それを生徒たちにも言わせませす。指折り数えながら、やっぱりそれが言える生徒から入れるようになります。

福山：それは1回言っただけではだめですよ？

谷本：しつこく言い続けています。うろろ歩いて教えながらも「イチ、ニ、サン、シ…」と言い続けています(笑)。

福山：言葉にすると、できるものでしょうか？

谷本：僕自身が小さい頃、ピアノの先生に「タンタカタン」と言われたら「タンタカタン」と弾いていました。だから生徒にも、そうした方がいいのではないかと思います。

福山：邦楽の世界では唱歌がとても大切にされてきましたし、そこに通じるような役割があるのかもしれませんが。それから、まめに動くことも大事ですね。たくさん動くんだと今日の授業で感じました。高校の座学の先生からすると、音楽科の教師はそれほど動いていない印象をもつようです。ピアノの前に座って、ずっと弾いて歌っているんじゃないかって。でも動かなくては指導できませんよね。そういう細かいところで生徒を育てることができる実感しました。たまに不安になるんです。こんなことをして意味はあるのだろうか。

谷本：指導者のエネルギーが生徒を左右すると思います。こちらが諦めたら、生徒はもう伸びません。器楽合奏に



○ふくやま・まさみ
大阪府立守口東高等学校教諭



入ったら生徒が「先生楽しそう」って言うんですよ。「分かる?」「先生、楽しくなったら首振るやろ」「うんうん、そうそう」って(笑)。器楽合奏で生徒たちと近くなったなと思います。

鑑賞との関わり

福山:『カルメン』についての説明はなさったのですか?

谷本:深く話すと大変なので、軽く触れる程度です。DVDがあるので、指揮者が出てきて1幕の前奏曲が終わるあたりまでは、こんな感じだよ、と見せています。

福山:前奏曲にはいろいろな要素が入っていますが、その場面ごとのお話はされますか?

谷本:こんな感じということは伝えていきます。〇〇がどうしてね…という話をすれば長くなりますし、説明するよりは全部見せたほうが早くなってしまふ(笑)。でも全部見せたら4時間かか

りますからね。

福山:難しい判断ですが、音楽の授業で「演奏」を目標にするのであれば、そういう伝え方になりますよね。

谷本:音楽の性格…旋律やリズムの性格を、指導者はきちんと勉強して分かっていなければならないと思います。『カルメン』であれば全編を鑑賞したり、少なくとも部分部分はきちんと見たりして、こんなせりふのやりとりがあるんだということぐらいは知って授業に入るべきです。でも生徒は、「こんな音楽だよ」「アップビートだよ」「ダウンビートだよ」ということを教えれば、結構「らしい」ことをしてくれるんですよ。

福山:そうですね。今日の授業も『カルメン』になっていました!

評価の課題

福山:今日のような合奏の授業の場合、評価はどうされていますか?ワークシートのような毎時間の評価は難しい

かと思うのですが。

谷本:申し訳ないのですが、できません。新しい学習指導要領に合っているのか、そぐわないのかということについては、評価一点でとても難しくなります。ただし行事がありますから、そこで音楽を味わっているか、楽しんで演奏しているかは判断できますよね。個々の役割がこれだけ違えば、同一の評価はできないでしょう。「興味・関心」では評価できても、技術的な評価となると不公平が生じてしまいます。個人内絶対評価であれば可能ですが、まだ難しいところです。

福山:音楽会が終わってから、感想文などを書かせるのでしょうか?

谷本:音楽会後の授業で、取り組みの中で思ったことや反省点、感想を書かせ、僕が目を通してから、担任の先生に渡しています。そのクラスで最後の行事になりますし、その感想文の一枚一枚から生徒のがんばりを感じてほしいな、と思います。

中学校で合奏を実践するには

福山:小学校では合奏を経験したけれど、中学校ではリコーダーの二重奏か、和楽器に文字通り触れるくらいというケースが増えていると聞きます。今日のような合奏は、中学生にとってはうれしいだろうと思うのですが、どういふふうに工夫すれば、扱えるようになるのでしょうか?

谷本:例えば今回、EXILEの『I Wish For You』や、いきものがかりの『ありがとう』を選んでいるクラスもあるんです。ポップスの場合は、特に耳から入っていますから、意外にすつと進むんです



よ。そういう意味ではポップスを導入するかどうかは、案ずるより産むが易しかもしれませんね。でも器楽合奏を導入しようと思ったら、目を離しても大丈夫だという人間関係を生徒と築かなければいけない。木琴の生徒を教えているときに、あちらで「わー！」と騒がれたら終わりですから。むしろ授業力というよりは「生活指導力」が必要かもしれないですね。あとは、授業をされる先生自身が楽しむことだと思います。

福山：あれだけの合奏をするとすると、器楽は器楽、と独立して考えておられますか？

谷本：例えば、創作とまでは言えないかもしれませんが、キーボードの音色について、今はわざとストリングスでそろえてあります。それを「君たち好きに選んでごらん」と言えば、そこから創作がスタートすると思うんですよ。原曲に近い音を選んでくる生徒もいるでしょうし、僕が思いつかないような自由な発想で楽器を選ぶ生徒がいるかもしれません。

福山：実は、高校3年生に去年『ジムノペディ』をキーボード2人で分けて演奏させたのですが、「自分たちでこの曲に合った音色を選びなさい」という課題を出したら、すぐにはできなかつたんです。そのとき、この課題でも彼らにとっては難しいんだなということを痛感しました。創作的な部分は伸ばそうと思えばいくらでも伸びる気はするのですが、その基本的な部分、例えば器楽でどんな曲に取り組んできたかなども重要になってくると今日つくづく思いました。リズムも、ちょっとずつ楽譜と変えてらっしゃいますね？

谷本：はい。変えたほうが演奏効果が上がると思えば、変えてしまいます。

福山：最初から完成した楽譜を渡す必要性もないんだと少し安心しました。とにかく最低限の簡単な楽譜からちょっとずつ発展させることを経験させていくのも大事なんだなあと。

谷本：それが、個に応じた指導だと思います。

演奏を発表する意義

福山：特に私が大事だなと思うのは、人に聴かせるときに何に気をつけるのかということです。自分が楽しむのも大切ですが、聴かせるときには何か伝えたいはずだ、ということに気付いてほしいのです。伝える意思、例えば「ここすごいやろ」とドヤ顔をする、そういうプレゼン能力を育てることが、音楽科において大切だと考えています。そういう発表の機会が校内にあるということはすばらしいことだと思います。またこちらから与えた課題ではなく、自分たちで選んだ曲について責任をもって最後までやるということが非常に大事だと思います。

谷本：責任感ですよ。

福山：そうなんです。生徒に「音楽ってなんであんな、って思っている人もいるかもしれないけれど…」と話しているときに、責任の話とプレゼンの話は必ずします。それを実感できる校内発表の場がある、ということは本当にいいことです。でもないところからつくるのって大変ですよ。私にもできるかな(笑)。

谷本：職員に向けて出さなければいけないエネルギーも半端なものではありません。

福山：はい。

谷本：そういう意味では、この学校には歴史としてすでにあつたので…。僕が来てからしたことは、ひな壇を作ることぐらいでした(笑)。



特集

研究大会に向けて 三重県津市からの 実践報告

毎年行われる多くの研究大会の中から、今秋開催される東海北陸小中学校音楽教育研究大会をご紹介します。研究会での取り組みや、小学校・中学校の授業者の先生方から、ふだんの授業と大会に向けた実践についてお寄せいただきました。



第13回東海北陸小中学校音楽教育研究大会開催にあたって

三重県小学校音楽教育研究会会長

佐野孝之

(津市立雲出小学校校長)

平成25年10月25日(金)、三重の地において東海北陸小中学校音楽教育研究大会を開催させていただくこととなりました。「音楽研究会で三重県って行ったことある?」「三重県の音楽教育って聞いたことないね。」などというお声が聞こえてきそうです。実は、このような大きな研究大会を開催させていただくのは30年ぶりのことです。会の運営に関しても、音楽教育の実践に関してもまだまだ未熟な面が多く、研究大会として十分な成果を発信させていただけるか不安もありますが、本県にとりましては、大きなチャンスをいただいたものと精一杯の準備と研究推進に向けて取り組みを行う所存であります。多くの皆様のご参加を得て、ご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

小・中の研究会について

稲垣博美

(津市立倭小学校校長)

東海北陸小中学校音楽教育研究会は、全日本音楽教育研究会に所属し、三重県、愛知県、岐阜県、静岡県、石川県、富山県、福井県の7県の音楽教育研究会で組織されています。平成2年度より隔年で東海北陸研究大会が開催されることになり、これまで12回を数えています。今年度は三重県で「第13回東海北陸小中学校音楽教育研究大会」を開催することになりました。

本大会のテーマは“響く音の輪、輝く笑顔”としました。

音楽活動を通して表現したい自分の思いや意図を伝えたり、友だちの感じ方や表現の工夫を知ったりすることができれば、互いに共感し、つながり合うことができるのではないかと考えます。音楽を通してつながり合うことで友だちの輪が広がっていき、“響く音の輪”ができることに感動し、笑顔が生まれるのだと思います。

そして、音楽の楽しさを経験した子どもたちが音楽を好きになり、生涯にわたって音楽に親しみたいと思うように育ててほしいとも願っています。音楽の授業で「できるようになった」「感動した」「楽しかった」「気持ちよかった」などの充実感や満足感を味わうことができれば、その体験



や感動が、子どもたちの“輝く笑顔”を生み出すことになるだろうと考え実践を行っています。また、音楽のよさをどう捉えるかについても議論を重ねています。

そこで、三重県小学校音楽教育研究会と、三重県中学校音楽教育研究会が連携し、各部会別のテーマを次のように設定し、取り組んでいるところです。

小学校部会：「音楽に親しみ、そのよさを感じ、思いをもって表現しようとする子どもの育成を目指して」

中学校部会：「人とのつながりを生かして、音楽を楽しみ、表現を深めようとする生徒の育成を目指して」

大会当日は、津市内の4つの小学校(3会場)、2つの中学校(2会場)での公開授業と、三重県総合文化センター中ホールでの全体会を予定しております。



楡形小学校「音楽づくり」 の実践

津市立楡形小学校
伊藤昌子

楡形小学校は、三重県の県庁所在地、津市西部ののどかな田園地帯にある児童数100名あまりの小規模校です。本校では「豊かな心を持ち、進んで創造する子の育成」を学校教育目標とし、豊かな感性と、仲間とつながろうとする力を育みたいと考えて、全校合唱や金管バンドに取り組んでいます。共に音楽活動を楽しみ、感動する体験を重ねることは、子どもたちの感性を育てることにつながります。音楽の美しさや楽しさを共感しながら、仲間の思いに気づき、仲間との関わりを豊かにしていきながら学びを広げ、深めていきたいと願って実践を積み重ねてきました。

昨年度は、4・5・6年生による金管バンドと2部合唱、「くしがたコンサート」などの行事での学年発表、全校合唱など、年間を通してお互いの演奏を聴き合う機会を多くもつことができました。その中で、私は3年生21名を担当し、「音楽づくり」の研究に取り組んできました。

1学期は、3音を使ってひとり2小節ずつの旋律づくりをしました。その後、『おかしのすきなまほう使い』では、魔法をかけるときの音づくりをして楽しみました。2学期に行った「おはやしをつくらう」では、おはやしの旋律と打楽器のリズム、かけ声をつくって組み合わせました。そして音楽物語『かさじぞう』では、旋律とリズムを重ねて、8小節の曲をつくらうという課題に取り組みました。それを、朗読と寸劇、歌と組み合わせ、オリジナル版『かさじぞう』を作り上げま

した。子どもたちは、いろいろな楽器を組み合わせ、鳴らし方を工夫するおもしろさを発見するという経験を通して、仲間と共に音楽をつくり出す喜びを感じられるようになってきました。自由な発想をもって即興的に表現しようとする意欲が育ってきたことは、ひとつの成果でした。また、イメージに合う音を探し、組み合わせたものを、紙テープや記号を使って記録することもできました。今後は、自分たちのつくり出した音楽を表現する技能を身につけることと、いわゆる効果音から、〔共通事項〕を手がかりとした音楽的な表現に発展させることを課題と捉えています。3学期の全校集会の場で音楽物語『かさじぞう』を発表した3年生の子どもたちは、「こんな音楽をつくったよ」「みんな聴いてね」と、誇らしげに見えました。音楽物語『かさじぞう』は、この1年間の「音楽づくり」の学習の集大成となりました。

本校では、音楽担当者だけではなく、教職員同士がアドバイスし合い、積極的に子どもたちにかかわりながら音楽活動を進めています。今後大会に向け、さらに研究を重ね、大会では子どもたちの生き生きと活動する姿を見ていただきたいと思っています。

朝陽中学校での研究大会 に向けた実践

津市立朝陽中学校
川本由美

● 学校紹介

朝陽中学校は、津市の北部にある昭和23年に開

校された、現在、生徒数562名の市内有数の大規模校です。学校の所在地、河芸町は伊勢湾に面した場所にあり、漁業や農業が昔から盛んに行われており、宿場町として栄えた穏やかな街です。

このような環境の中、生徒たちは勉強はもちろんのこと、盛んな部活動にも積極的に参加し、学校のあちこちには生徒たちの元気な声が響いています。毎年行われる文化祭恒例のコーラスコンクールは、各クラスごとに選択した合唱曲に取り組み、どのクラスもまとまった美しいハーモニーを奏でてくれる一大行事となっています。

また本校は、保護者や地域住民が責任をもって学校運営に参画し、地域が一体となって取り組むコミュニティ・スクールの指定を平成17年に受けており、地域に根ざした学校として日々、学校運営が行われています。

●研究大会に向けて

中学校部会では、大会テーマ“響く音の輪、輝く笑顔”を受け、人と人、音と音のつながりを生かした音楽活動が、生徒の笑顔を生みだすと考えました。そこで中学校部会のテーマを「人と音のつながりを生かして、音楽を楽しみ、表現を深めようとする生徒の育成を目指して」とし、秋に行われる三重大会に向けて生徒と教師が共に音楽活動を行っています。そんな中、日頃の授業を通して感じることは、自分の気持ちを人に伝え、表現することが苦手な生徒が増え、コミュニケーション能力が低下しているのではないか、ということです。音楽は、美しいものを美しいと感じたり、また、他者と共感したりする活動が中心となる教科です。そこで少しでも生徒同士がつながり、活動

しやすくなるよう小グループ活動を取り入れ研究を進めています。

●研究授業に向けて

～『さくら さくら』の旋律に、副旋律をつけて箏で表現をしよう～という題材で創作活動を行います。

本校では学習指導要領に基づき、年に一度、和楽器(箏と尺八)の表現活動を行っています。生徒の日常生活では和楽器の演奏に触れることがほとんど無いため、この機会に本物に出会ってほしいと考え、箏と尺八の先生をゲストティーチャーに迎え、模範演奏と技術指導をしていただいています。この授業では、箏で『さくら さくら』を弾くこと、尺八は音を出せるようになることを目標にしています。本当にわずかな時間しか和楽器に触れることができませんが、生徒たちは「箏の音はいいなあ」「今度はいつ箏を弾くの?」「尺八が鳴らせたよ…」などと言いながら、興味深く練習に取り組んでいます。

今回の研究授業では、伝統楽器である箏を用いて『さくら さくら』の旋律に合う副旋律をつくり(創作活動)、箏の楽譜(縦書き)に弦名を書き込んで合奏することに挑戦します。活動は4名一組で行い、本時への導入として、創作活動になれるために「リズム遊び」やアルトリコーダーを使った旋律奏等を予定しています。

この研究大会に向けて、生徒ひとりひとりとながら、音楽を楽しみ、表現を深められるような音楽活動ができるよう取り組んでいきたいと考えています。





学校音楽とアウトリーチ

第1回 アウトリーチとは何か？——実践報告

佐野 靖 (東京藝術大学教授)

小井塚ななえ (東京藝術大学大学院博士課程)

松浦光男 (東京藝術大学教育研究助手)

学び合うアウトリーチを目指して

いま、音楽による「アウトリーチ」の活動が、いろいろな文化施設や芸術団体、大学などから発信されていることをご存知の方も多と思います。学校などの教育機関をはじめ、病院や福祉関係の施設などを中心に、音楽アウトリーチの輪は広がりを見せています。

ただし、アウトリーチという言葉の意味は？従来の出前の音楽鑑賞教室とどう違うの？と聞かれたら、明確に回答できる方は、それほど多くないかも

しれません。

本連載は、学校音楽にかかわるアウトリーチに限定し、その具体を紹介するとともに、学校音楽の質的な向上のために、アウトリーチがどのような可能性を持っているのか、あるいは実践的な課題は何なのか、アウトリーチの経験を通して演奏家たちは何を学んでいるのか、子どもたちに何が育っているのか、などを読者の皆様と一緒に考えていく場にしたいと思っています。

私自身、本務校で「音楽アウトリーチ」という授業を立ち上げ、いろいろな

学校や幼稚園、病院等で様々な音楽活動を展開しています。アウトリーチというと、「出前演奏」がイメージされますが、この授業では、できるだけ受け入れ側のニーズに即したものを提案するように心がけております。しかも、若い学生たちは発想が豊かです。彼らからもいろいろなアイディアを出し、双方向で創意工夫を図るプロセスにアウトリーチの本質があると考えます。

例えば、打楽器専攻の学生たちは、音色に対してひととき鋭い感性を持っています。子どもとのかかわりにおいて、

まるで楽器にふれるときのように相手の反応を即座に感じ取る感受性も身に付けています。打楽器の基本奏法の指導過程で、子どもたちに音色へのこだわりが生まれ、その学びを今度は教師が音楽づくりの活動に生かすような実践も生まれています。また、作曲科の学生たちは、どうしたら中学生が創作への苦手意識を克服し、一歩目を踏み出せるかを必死に考え、様々な方法を提案します。それらの方法に対して、生徒の実態を熟知した教師から終始意見が出されます。そうして学ぶ実践知は、学生たちにとって何よりの宝物なのです。さらに、しっかりと聴く態度を養いたいという意向を持つ幼稚園では、子どもの集中力が続くような選曲や演奏方法の工夫が求められます。継続的にアウトリーチを繰り返す中で、子どもに馴染みの曲を含めることは重要であるが、その一方で演奏者側がどうしても聴いてほしいと願う曲を演奏することも大切であることを、演奏者、園の先生方双方が実感できるようになりました。子どもにもいわば十八番の曲は通じます。子どもにはこうした曲は難しすぎる、子どもにはアニメやジブリ系の曲でないと受けない、などという固定的な考えは、演奏者側の工夫や力量によって十分克服できるものなのです。

もちろん、まだまだ課題もたくさんあります。しかし、アウトリーチの経験



を通して、音楽を提供する学生たち、受け入れ側の先生方や病院関係者たち双方が明らかに変わってきたことがあります。互いに学び合おうとする意識が醸成されてきているのです。「音楽すること」に役割こそ違え、ともにかかわり合うことを通して、新しい発見、気づきがたくさん生まれています。

第1回は、アウトリーチという言葉の概念や近年の動向をお伝えし、実践事例としては、吹奏楽の基礎練習を通してはぐくまれたものを紹介することにします。

(佐野 靖)

アウトリーチの定義と動向

“アウトリーチ”という単語は、もともと「手を伸ばすこと、地域社会への奉仕活動、出張サービス」という意味の“outreach”に由来し、1990年代後半から公立文化施設において、日ごろ文化芸術に触れる機会の少ない住民に対して文化芸術に触れる機会を提供する事業として定着してきた。音楽の分野では、音楽家と聴き手が双方向にかかわり合いながら音楽を味わう活動として注目され、多様な実践が行われてきた。近距離で交わされる視線や言葉、そして音楽が織りなす生々しい空間は、アウトリーチの特徴であり、新たな学びの可能性を秘めている。

アウトリーチは、アメリカやイギリスの教育プログラムや文化政策の中で発展してきた方法論であるが、日本への導入当初は主に、地方自治体が抱える公共ホールの活性化を目的とした文化政策の側面が強調された。このよう



な経緯でスタートしたアウトリーチも、導入から約15年が経過した現在では、その活用範囲が拡大し、大学の社会的役割や教育・福祉現場での必要性を論理的に発信するようになった。

アウトリーチの内容は多岐にわたるが、その手法は大きく「派遣型のコンサート」「音楽体験・創作型ワークショップ」「レクチャー・コンサート」「実技指導・クリニック」「教養型セミナー・講座」「施設体験型事業」の6タイプに分けられる。

実際には、これらの要素が複雑に絡み合っているが、上記のようにひとくちに「アウトリーチ」といっても、その言葉は多義に解釈できる状況であることがわかる。

このように、日本では「アウトリーチ」という用語を文化芸術普及として広く捉え展開してきたが、主な事例を年代に沿って分析していくと、日本におけるアウトリーチの特徴が見えてくる。

まず、音楽家が意識する以前にプロデューサー側が始めたため、現在に至

るまでその発展の背景には、提供側、特にマネジメントの意向が強く働いているということ。そして、「アウトリーチの形式そのものが新しく、価値があった時代」から、多様化していく過程で「内容への意識の高まり」が加わり、現在は「質の高さを支えるための教育や人材開発」の段階へとシフトしている状況だということ、である。

こうして普及したアウトリーチだが、数多くの事例報告やノウハウ本も出版され、誰でもアウトリーチの形式や手法を用いて活動することができるようになったと言える。しかしながら、「派遣する」というアウトリーチの形式模倣にとどまる事例や、企画だけが一人歩きし、音楽そのものを味わうという目的や方法が不明確な事例も多く、適切な評価や整理が昨今の課題である。

(小井塚ななえ)

実践報告

基礎練習を通して何が育ったか

● 基礎練習はなぜ必要か

プロはもとより意識高いアマチュア奏者は、日常的に基礎練習を実践している。基礎練習とは、テクニックの向上・維持だけでなく、その日の調子や身体の状態を知るためのバロメーターとして、さらには、「音楽」に必要な「音そのもの」を確認する重要な練習である。導入期の生徒たちに演奏する楽しみ、喜び、達成感を感じさせるためには、この時期に適切な基礎練習の習慣を身に付けさせることこそが近道なのである。

今回の指導の眼目は、基礎練習の重要性を生徒に伝え、学び方を身に付けさせることである。筆者は、仙台市立富沢中学校において、フルートや打楽器の奏者たちとアウトリーチとして指導&ワークショップを行ったほか、2度ホルンの指導を実施している。ここで



は、計3回の活動をアウトリーチとして位置づけ、そうした活動を通してホルンパートの生徒たちに何が育ったかを明らかにしたい。

● 基礎練習の内容

提案した基礎練習は、「楽器を用いなくとも可能な練習」と「楽器を用いた練習」の2段階に分けることができる。練習内容は以下のとおりである。

【楽器を用いなくとも可能な練習】

- 姿勢の確認：足の位置の確認が重要。足裏がしっかりと地面(床)についていることにより身体が安定する。座位の場合は足を組んだり伸ばしたりせずに、すぐに立てるように。立位では、つま先に重心がかかるように意識する。
 - 呼吸：息を吐くことに重点をおく。身体から力みが抜け自然に呼吸ができることによって、息の吸い込みが増加する。
 - マウスピースを用いた練習：マウスピースの持ち方を習い、ロングトーンを実践する。これは、マウスピースをホルンに装着した時にも有効であり、呼吸の練習の一部でもある。息(呼吸)、お腹を意識することは、音量の増加や音色の変化につながり、その結果、アンブシュアが安定する。さらにタンギングやスラーの練習にも関連してくる。
- ここまでは、いつでも・どこでも可能な練習である。しかし、すべてが連動しなければ効果が薄れてしまう重要な練習であり、基礎練習の核となる部分である。



【楽器を用いた練習】

- ホルンを用いた練習：生徒一人一人に合った構え方をすることが大切である。音を出す際には、マウスピースでの練習を生かすようにする。豊かな音色や音の立ち上がりをイメージすることを練習の重点とする。
- 耳を使った練習：音程や音色(響き)が合っているのか合っていないのかを生徒自らが気付くことが重要である。音程や音色の追求のために、できるだけチューナーを使用せず、「耳」を使った練習によって、周りの音を客観的に聴けるよう、生徒自らの気付きを段階的に養う練習である。

学校における吹奏楽の活動時間は短く、個人的に時間を確保するのは難しいと考えられるので、上記の練習は15分程度で終えるようになっている。ホルンに限らず吹奏楽器全般に応用ができるので、できるだけ毎日の練習の一部に取り入れて欲しいと願っている。

●生徒に育ったもの

ホルンパート7名の生徒たちが綴った振り返りノートから、いろいろな成長や変容を見て取ることができる。

まず第1に、生徒全員が真剣に練習に取り組み、効率よく時間を使うようになるなど、学習意欲や取り組み方に変化が見られるようになった。第2に、楽器を演奏する喜びや楽しみが大きくなり、楽器を大切に扱うなど楽器に対する認識の変化が表れるようになった。第3に、これまで無意識に楽器に息を吹き込んでいた生徒たちが、呼吸に対する意識の変化から、豊かな響きでホルンを鳴らすことができるようになった。このことを実感した生徒は、さらにより響きを求めていっそう丁寧に呼吸の練習に取り組むようになっていく。第4に、意識して耳を使い、他人の音を主体的に、かつ注意深く聴くようになってくるなど、音へのかかわり方に変化がみられるようになったことがあげられる。こうした「聴き方」の変化が、響きやアンサンブルの質の向上につながっていく。第5に、自分の音を振り返り、自己評価をする力が育ったことである。よい音を出すためには明確なイメージが必要であることを実感できたのである。

こうした生徒たちの変容は、ひとえに基礎練習の意味を一人一人が理解し、演奏を通して実感、納得したからにほ

かならない。基礎練習の習慣化により、生徒は自ら考え、生徒同士で意見交換し合うようになった。そこから相互理解が生まれ、意欲・関心・態度が高まったのである。よい意味で競争心が芽生え、目標や目的意識が共有されモチベーションが高まることによって、責任感が育まれ、人の気持ちを思いやる心などが養われたのである。そうした心情面の成長は、音楽的な成長と相乗的である。3度目の指導の際には、初回と比較すると、音程や音色、音量の点で格段の進歩が見られた。さらに、楽譜からいろいろなものを読み取る力も上がり、表現の幅を広げることにつながったのである。

この一連の指導では、基礎練習に焦点をしばったからこそ、逆に波及的に学びが広がり、深まったと考えられる。また、音楽する楽しみや喜びを互いに深めていくためには、学び合う場がいかに大切かをあらためて実感することができた。こうした実践経験の場を与えてくださった学校、そして生徒たちに深く感謝する次第である。

(松浦光男)



コウケンテツが贈る
世界の食文化と音楽

第2回 今の食事は未来の自分をつくる

料理研究家コウケンテツさんによる食文化と音楽をめぐるお話第2弾。今回は、プロフェッショナル性や地域性についてなど、少し踏み込んだお話をお届けします。食と音楽はどのような違いをもち、どのような共通点をもつのでしょうか。

(取材・構成：ヴァン編集部／イラスト：ソリマチアキラ)



料理人の修行にレッスンはなし！

——料理人の修行はたいへん厳しい世界なのでしょうか？

コウ：はい、意外に閉ざされた世界ですから。僕は厨房に入って何年、という修行の仕方はしていませんが、恐ろしくて入れないですね。

——料理人にとって修行の基礎・基本は何ですか？

コウ：まずはお皿を洗うこと。それから、見て盗むこと。専門の人が、みじん切りはこうするんだ、と教えてくれるレッスンはないんです。ずっと皿洗いをして注文を取っていて、いきなりある日突然「みじん切りをしてみろ」と言われる。そしてできないと、めちゃめちゃ怒られるんですよ。習っていないのに怒られる。

——和食であろうが洋食であろうが、同じですか？

コウ：そうです。「今まで皿洗いしながらなにやってたんだ」と。僕も母親に料理は教わっていません。経験を積んでいくと、師匠に味をみてもらって助言してもらうというレッスンの仕方は出てきますけどね。

レシピを書く作業と、詩を書く、楽譜を書く作業はよく似ている

——個性を出すとはどういうことでしょうか？

コウ：自分なりの結論を導き出すことだと思います。修行中、みじん切りや乱切りを「悪い」とは言われますが、どうしたらいいのかわかしてあげてもらえませんが、自分で導き出すからこそ、創意工夫が生まれるのではないのでしょうか。それを積み重ねていくことで、自分の味が出るんだと思いますよ。

——なるほど。

コウ：僕は料理研究家としていろんなバリエーションを求められるので、一時期はイタリア料理、トルコ料理、中華料理などなんでも作っていました。でもそれでは核がないなと思ったんですよ。僕の核となるのは本来のバックグラウンドである韓国料理で、それをうまく生かした中華だったり、イタリアンだったりするのだと思います。そう突き詰めることで、逆に仕事の幅

は深まりました。そしてそれが僕の個性やオリジナリティにつながったと思います。みなさんそれぞれ自分でレシピを書かれますよね。その作業は詩を書く、楽譜を書くという作業とよく似ていると思います。みじん切りの仕方、煮込み方など、なにかしらシェフなりのメッセージがある。例えば牛肉の赤ワイン煮込み。これ一つにしても、人によって全然違うんです。そのメッセージをうまく受け止めてもらえたらなと思います。

——料理人の方は、自分のレシピを書き留めていらっしゃるんですか？

コウ:もちろんです。これが財産ですから。

——いろいろな人が作ったものを食べた方が勉強になるのでしょうか。

コウ:そうですね。僕も駆け出しの頃は、お金がない中、なんとか外食して、その味を家で再現するということをしていました。時にはシェフに聞いたりして。意外に親切に教えてくれるんですよ。

イタリアンのシェフは麻婆豆腐を作れる？

——中華料理やフランス料理のシェフが他のジャンルの料理を作ることは可能でしょうか？

コウ:味の要素として取り入れるのは可能ですが…、いきなり中華の煮込みや麻婆豆腐を作れるかというと、難しいと思いますよ。専門性の高いことなので。僕のような「料理研究家」であれば可能ですが、イタリアンのシェフが麻婆豆腐を出してきたら「なにそれ？」となりますよね。プロフェッショナル性を求められるほど、他の国の料理を作るのは難しくなると思います。

旬のものを食べよう

——いい食材を選ぶための、アドバイスはありますか？

コウ:市場などで買えればベストですが、そうもいかず、スーパーに行かなければならないときには、やっぱり「旬」ということを頭に入れておいた方がいいと思います。

——旬のものですか。

コウ:スーパーでは、1年中あまり変わらない素材が売られていますが、それでも「旬」のものはクローズアップして置かれています。なぜ旬の食べ物がいいかというと、そのときにいちばん栄養価が高いからです。プラス、大量に出回るので値段も安い。そう考えると一石二鳥な

んですよ。日本だと、秋にはさんまを食べようなどあるじゃないですか。それは栄養面でもコスト面でも理にかなっているんです。素材の選び方って難しいものですが、なんとなく、春は青い野菜、夏はカラフルな野菜、秋は根菜やきのこ類、冬はぶりや白菜にゆず。旬の素材って、手間を加えなくてもおいしいから、ただ塩をただけの、ぶりの塩焼きでもじゅうぶんうまい。そういう意味でも、すごく助かると思います。でも旬じゃない素材を使うと、味が落ちるので味の工夫が必要になるんですよ。

季節感を大切に

——季節の移り変わりや、旬があるというのは、日本のいいところですね。

コウ:「日本の誇れるものは何ですか？」という問いに対して、30年前は「四季の移ろいの美しさ」という回答が8割だったというデータを見たことがあります。でも残念ながら今はそうじゃないかもしれません。日本の四季や、四季とともに食材が移り変わるということは本当に世界に誇れるものなので、大切にしてほしいと思います。



——韓国はどうか？

コウ：韓国は暑いか寒いか、極端です。だから性格も直情的だし、味も辛いもの、薄いものとはっきりしています。ソウルって、夏は沖縄よりも暑くて、冬は札幌よりも寒いんですよ。だから時期によって、これを食べるとするのはパッキリ決まっていますわ。わかりやすいんです。

——辛いものを好むのはどのような背景からきているのでしょうか？

コウ：気候の激しさが関係していると思います。夏も冬も唐辛子を食べますが、夏は辛いものを食べて汗をかくことで、体の熱をおさめる。逆に冬は体を温める。

——アジアに辛いものが多いのは、気候に左右されているからでしょうか。

コウ：そうです。暑いですからね。唐辛子の韓国への伝来にもいろんな説があって、中国大陸か東南アジアから韓国に伝わったという説や、日本から伝わったという説もあるらしいです。そのあたり、隣同士の国、文化の交流があったのでしょね。もともと朝鮮半島には唐辛子はなかったんですよ。

——インドのスパイスについてはどうでしょうか？

コウ：昔はスパイスのあるところは限られていましたし、戦争の理由がスパイスの獲得でしたからね。暑い熱帯地域で育ったスパイスは、殺菌作用などの薬用的な意味で使われていましたが、インドはそれにしても種類が豊富ですよ。音楽でいうと、主旋律だけでなく、いろんな音が組み合わさったような感じでしょうか。

スリランカにも鯉節?! フランスにも生肉?!

——海外を歩いていて、印象的だった食べ物はなんですか？

コウ：山ほどありますが…、インドの南、スリランカでは鯉節を使うんですよ。日本だけかと思ったら、歴史



的にいうとスリランカの方が鯉節に関しては深いんですよ。インド洋で鯉が獲れるからなんですけど…鯉は英語で「モルディブフィッシュ」といいます。スリランカの市場に行くと、本当に鯉節だらけですよ。日本のように繊細なものではなくてビーフジャーキー的なものですが、それを砕いてカレーに入れるんです。うまみのもととして。だから鯉節はスリランカから日本に伝わったんじゃないかともいわれています。かたや繊細なだしを取る鯉節、かたやガンガン砕いてスパイスの効いたカレーのうまみのもと、っていうのもおもしろいですよね。スリランカのカレーはインドのカレーよりも汁っぽいので、だからこそうまみが必要なのかなとも思います。

——ヨーロッパで印象的だった食事はありますか？

コウ：おもしろかったのは、ヨーロッパ唯一の生肉食のタルタルステーキです。タルタルって、モンゴルの馬肉を叩いて作られていたものが、牛肉になって伝わり、ケッパーとか薬味をいっぱい混ぜたものですが…。以前パリのカフェで、メニューも読めないし適当に「これ」って頼んだんですよ。そうしたらタルタルが出てきて。僕の中にヨーロッパ人が生肉を食べるという考えが当時はなかったものから、(これはたぶんアジア人は生肉を食べるのだろうという差別だな)と思い「これなんや」って言ったんですよ。でも、店員さんは「は？」ってなっている。それで隣にいたアメリカ人が「これはパンにつけて食べるんだよ」って教えてくれたんですよ。それで、パンにつけて食べてみたら「あ、なるほど。すみませんでした店員さん」っていうことに(笑)。



食べる楽しさ・大変さ・達成感

—— 子どもたちへのメッセージをお願いします。

コウ: みんなで作ってみんなで食べる楽しさや達成感は、何事にも変えられないと思います。僕は一時期、厚生労働省の依頼で給食のプロデュースをしていました。日本の給食って本当にレベルが高いんですよ！きちんとだしから取っている。ただ一つ問題があって、それは時間が無いということ。子どもは好き嫌いがあって残すのではないのです。場合によっては食べる時間が15分しかない。子どもが食べられないのなら、先生はよいですね。ゆとり教育が終わっていろいろ変わっ

たからだと思いますが、家庭科の授業も減ってしまい、調理実習の時間もなかなか取れなくなったようです。でも僕は、子どもの頃からごはんと一緒に作って、食べる楽しさ、大変さ、達成感を味わってほしいと思います。包丁をにぎって火を使って料理する…危ないかもしれませんが、もっともっとトライしてほしいです。

時間はかかりますけど、僕も今、2歳の子どもと一緒にごはんを作っていますよ。今朝も、子どもは自分用の小さいフライパンでカボチャとサツマイモをじっくり焼いて、僕は野菜炒めを作りました。今、食事を作ることは、未来の自分をつくることなので、もっともっと作って楽しんでほしいと思います。

コウさんからのワンポイント・アドバイス

おいしいナムルの作り方～素材と対話するように

コウ: ナムルはいちばんシンプルでいちばん難しい料理でもあります。僕が唯一母親に教えてもらった料理がナムルです。明日独立して東京に行くっていう前の日に「ナムルを作れ」って。そのとき、素材と話をするように作れといわれました。

にんじん一つでも季節によって味が違います。味付けはいちばん大事なことです、みんな最終的に味をつけたものを味見しますよね。だけどそれでは味ってわからないんですよ。

にんじんのナムルは、細切りにしたものを、ゆっくりゆっくりごま油で炒めていきます。生のままでは苦いにんじんが、火が入ると柔らかくなって、甘くなります。そこで、味をつける前に、いったん味をみるんですよ。「あ、にんじん甘い」。それから、塩をする。最初の味を知っているから、ちょっとでいいとわかるわけですよ。大事なのは、火を入れて、素材のままの味をみること。

同じようにホウレン草のナムルも、ゆでてしばって切って、まず味見をする。そうしたら、あとどれくらい調味料を入れたらいいかわかりますよね。ゆでて炒めて、味をみて、味をつける。最初の時点で味をみれば、うまく作れると思いますよ。

—— ちなみに、調味料の分量は正確に計るべきでしょうか？

コウ: そんなことはないですよ。大さじ2の場合、だいたい半分ぐらいから入れることをおすすめします。まずは大さじ1だけ入れる。そこから味をみて足していくのが一番です。最初から大さじ2を入れて「うわっ辛い！」となった場合、もう後戻りはできませんからね(笑)。大さじって、だいたいカレースプーンの1.5倍ぐらいですから、あまり神経質にならない方がいいですよ。僕もふだんは計りませんが、レシピにするには計らないといけないので計りますけれど、みんな計るんかなあ？って思うときがあります(笑)。

● にんじんのナムル

材料

にんじん……1本
塩……少々
ごま油、白いりごま……各小さじ1

作り方

1. にんじんは皮をむいて斜め薄切りにしてから細切りにする。
2. フライパンにごま油を熱してにんじんを2分ほど炒める。しんなりしたら塩をふって1分ほど炒め、甘みが出てきたら、ごまを指ですりつぶして加え、混ぜる。



こう・けんてつ(高賢哲)

大阪府出身。料理研究家である母・李映林主宰のeirin's kitchenにてアシスタントを経験後、2006年に独立。
韓国料理を中心に、素材の味を生かしたヘルシーなメニューに定評がある。現在は雑誌や本、テレビ、ネットコンテンツ、イベントなど多方面で活躍中。講演会などでは自身の経験をもとに、家庭での食のあり方、食を通してのコミュニケーションを広げる活動に力を入れている。



新刊のご案内
コウケンテツの食パン食
NHK出版
定価1,470円(税込み)

Information

2013年に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研究大会

6月 June

● 20日(木)・21日(金)

兵庫県立芸術文化センター-KOBELCO大ホール(西宮市) 他

平成25年度 全日本音楽教育研究大会全国大会
兵庫大会(総合大会)
第55回近畿音楽教育研究大会

大会主題 「つながる 音・人・心」

事務局 兵庫大会実行委員会事務局

神戸市立明親小学校 校長 長永憲和

〒652-0896 神戸市兵庫区須佐野通4丁目1-19

TEL 078-651-2855/FAX 078-651-2856

E-mail: nor-osanaga@sch.ed.city.kobe.jp

全日音研兵庫大会情報ページ:

<http://www2.kobe-c.ed.jp/on-es/>

8月 August

● 14日(水)

東京都調布市グリーンホール大ホール

第35回全日本合唱教育研究会全国大会
東京(調布)大会

大会テーマ 「繋げる歌の力 広げる合唱の輪」
～私の合唱指導と新曲指導～

事務局 全日本合唱教育研究会東京支部

町田市立忠生中学校 小島邦昭

〒194-0035 町田市忠生3-14-1

TEL 042-791-0821/FAX 042-791-6514

10月 October

● 11日(金)

旭川市民文化会館大ホール 他

第55回北海道音楽教育研究大会 旭川大会

全道共通主題 「音楽のよさを生かし、
豊かな心と確かな力をはぐくむ音楽教育」

旭川大会主題 「豊かな感性と確かな力をはぐくむ
音楽教育の創造」

事務局 旭川市立神居東小学校内 佐野信孝

〒070-8011 旭川市神居1条17丁目

TEL 0166-62-2932/FAX 0166-62-2720

E-mail: koutyou@kamuihigashi.els.asahikawa-hkd.ed.jp

● 24日(木)・25日(金)

アクロス福岡シンフォニーホール 他

第54回九州音楽教育研究大会 福岡大会

平成25年度福岡県音楽教育研究大会

大会主題 「味わおう 音楽のよさや美しさ

伝えたい 心をつなぐ音楽の喜び(仮)」

記念講演 藤原道山(尺八奏者)

問い合わせ先 福岡市立横手中学校 校長 西村幸司

〒811-1311 福岡市南区横手4丁目16-1

TEL 092-501-6451/FAX 092-501-6452

E-mail: czr03750@nifty.com

● 25日(金)

三重県総合文化センター 中ホール 他

第13回東海北陸小中学校音楽教育研究大会 三重大会

大会テーマ 「響く音の輪、輝く笑顔」

事務局 津市立櫛形小学校 教頭 松岡みつ子

〒514-0071 津市分部1211-1

TEL 059-237-0851/FAX 059-237-5337

E-mail: 237-0851@city.tsu.lg.jp

11月 November

● 1日 (金)

仙台市青年文化センター、仙台市旭ヶ丘市民センター

第61回東北音楽教育研究大会 仙台市大会
第49回宮城県音楽教育研究大会 仙台市大会
宮城県高等学校音楽教育研究会秋季研究大会 仙台市大会

大会主題 「つなげよう音を つながろう人と
～音楽の力で 明日の笑顔を～」

事務局 仙台市立旭丘小学校 校長 高橋純子
〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3丁目27-1
TEL 022-233-5060/FAX 022-271-4485

● 8日 (金)

前橋市民文化会館 他

第55回関東音楽教育研究会 群馬大会
第48回群馬県小・中学校音楽教育研究大会 前橋大会

大会主題 「心ふれあう 豊かな響き」
副主題 ～感性を豊かに働かせながら
音楽活動の喜びや楽しさを味わう学習を目指して～

問い合わせ先 前橋市立大利根小学校 校長 島津 浩
(群馬大会 事務運営部長)
〒371-0825 前橋市大利根町2-12-1
TEL 027-252-8111/FAX 027-252-8122

● 15日 (金)

防府市公会堂 他

第44回中国・四国音楽教育研究大会山口大会

大会主題 「伝えよう音楽 つなごう心」
問い合わせ先 防府市立富海中学校 教頭 上田良夫
〒747-1111 防府市大字富海1246番地の1
TEL 0835-34-0023/FAX 0835-34-0296

12月 December

● 13日 (金)

東京都文京区立明化小学校

第20回全日本小学校管楽器教育研究大会・東日本大会
第29回東日本小学校管楽器教育研究大会・東京大会

研究テーマ 「伝えよう ぼくの私のハーモニー」
～音楽科授業における

管楽器活用と音楽活動の充実～

問い合わせ先 青梅市立第三小学校 橋本 研
〒198-0014 青梅市大門2丁目317
TEL 0428-31-7266/FAX 0428-32-7024

